

武蔵村山市立歴史民俗資料館報

# 資料館だより

第 20 号

平成 6 年 3 月 20 日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館

武蔵村山市本町5-21-1 TEL 0425(60)6620



伝・屋敷山出土の大甕

でん や しき やま おお が め  
伝・屋敷山出土の大甕

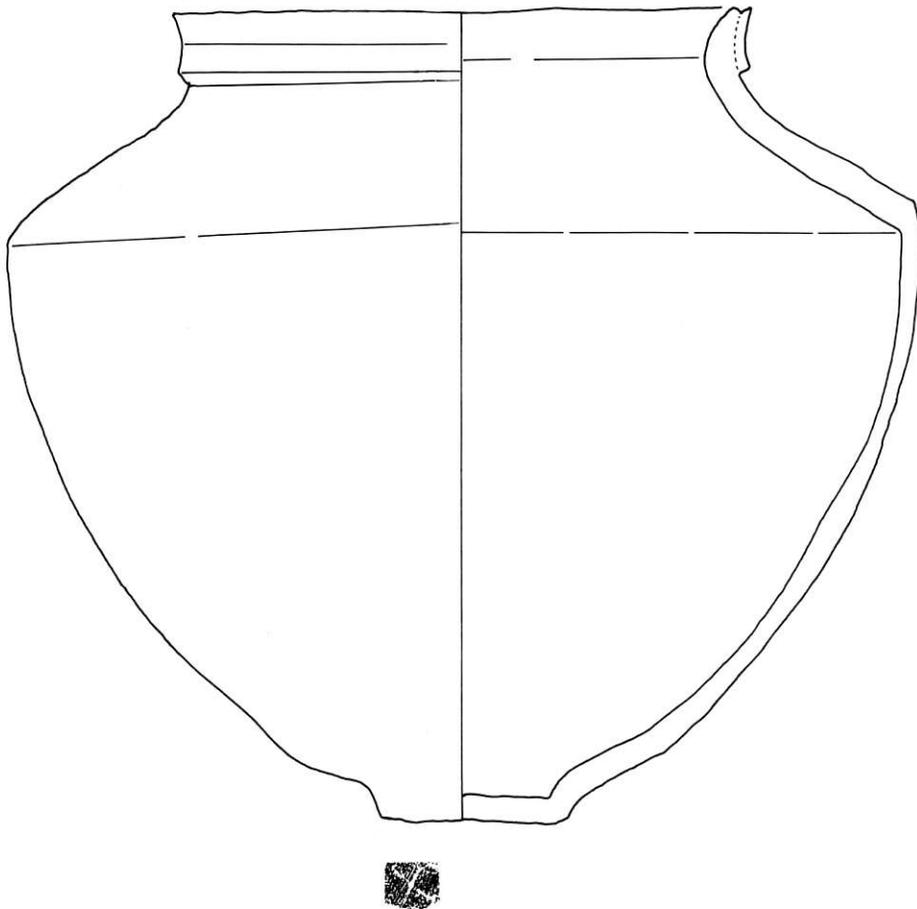
1 はじめに

平成5年8月3日、市内中央二丁目にお住まいの山田栄司氏より大甕1点の寄贈を受けた。この大甕は、山田家に数代前から伝来するもので、明治時代初期に市内屋敷山（旧小字名、現中藤一丁目）から出土したものであると伝えられている。この伝承は筆者も屋敷山周辺にお住まいの複数の方々より聞いており、ほぼ間違いのないものと判断される。ただし、後に述べるとおり明確な出土地点が不明であり、残念ながら本稿に「伝」を付けざるを得なかった所以である。

資料の受領に際して、本資料は山田家の物置内に板枠にはめ込むように据えつけられていた。かつては土間に置き、麦など穀物の貯蔵用に使用していたとのことである。資料の運搬は、当初の予想をはるかに上回

る大きさや重さのため困難を極めることとなってしまった。当館職員2名で台車等を使いながら何とか物置から運び出し、一時的に近所のお宅に保管していただいた。館への運搬は後日4人がかりでやっと成し遂げることができた。このことからその重さを知っていただけることと思う。

この大甕は見慣れた近世、近代の茶甕や藍甕に比較すると、極めて特異な形態であり、一見して古そうな印象を持ち得た。後に資料の検討を進める過程で、その形態や胎土から中世常滑（愛知県常滑市周辺）窯の製品であることが判明した。近年の中世考古学の進展は陶磁器類の位置づけをかなり精密なものとしている。そうした中世考古学の成果に照らしてみると、本資料



第1図 大甕実測図

は東国において完形で遺存した数少ない事例であること、また先述したようにその重さから運搬及び流通について考える好材料でもある。そして何より本市にとつ

## 2 資料の紹介

本資料は中世常滑窯産の大甕である。法量は実測図の計測位置で示すと、口径53.6cm、肩部最大径84.6cm、底径17.4cm、高さ73.6cmを計る。底部付近にヒビ割れがあり、口縁部にも欠損がみられるが、完全な形態を止めるものである。底部には後世につけられたセメントが付着している。器形は底部から胴部にかけて内湾しながら立ち上がり、肩部で最大径をとる。肩部から頸部にかけて内側に強く屈曲し、口縁部は直立に近く立ち上がる。口縁外側には幅5cmほどの縁帯面を有している。この縁帯の断面形は、頸部との間にほとんど隙間がなく密着した状態であり、わずかに口縁上端に窪みがみられる。いわゆる「N字状口縁」の痕跡を止めるものである。

成形痕は図示し得なかったが、肩部内面に横方向のへらの痕跡が顕著であった。色調は褐色が中心で、底部付近で橙色、黄橙色を呈する。肩部から口縁部にかけて一部灰白色の部分が斑状にみられ、その周囲に自然釉の付着がわずかに認められる。底部にはへらによる「×」印が描かれている。本資料は口縁部及び底部に大きな歪みがあり、不安定である。

この大甕の製作年代については、赤羽一郎氏の編年案（第2図）を参照すると、「N字状」の痕跡を止め

## 3 出土推定地

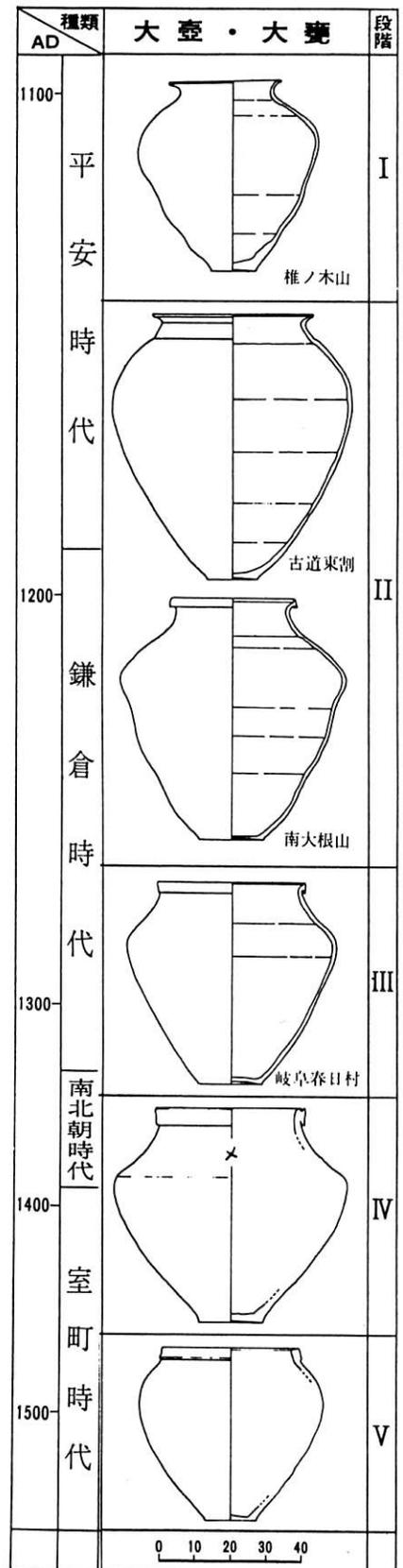
本資料の出土地点は冒頭でも述べたように不明である。しかし、聞き取り調査により複数の出土推定地が挙げられた。まず、寄贈者の山田栄司氏の談話の概略を示しておく。

- ①掘り出した人物……山田栄司氏の曾祖父で、万蔵という名前であった。
- ②掘り出した年代……曾祖父の代ということから明治時代の初期ではなかろうか。
- ③掘り出した場所……正確な場所は不明。ただし、「屋敷山」という屋号を持つ家（第4図に「ヤンキヤマ」と記した所）の裏から第三小学校までの範囲と聞いている。

て、数少ない貴重な中世資料である。

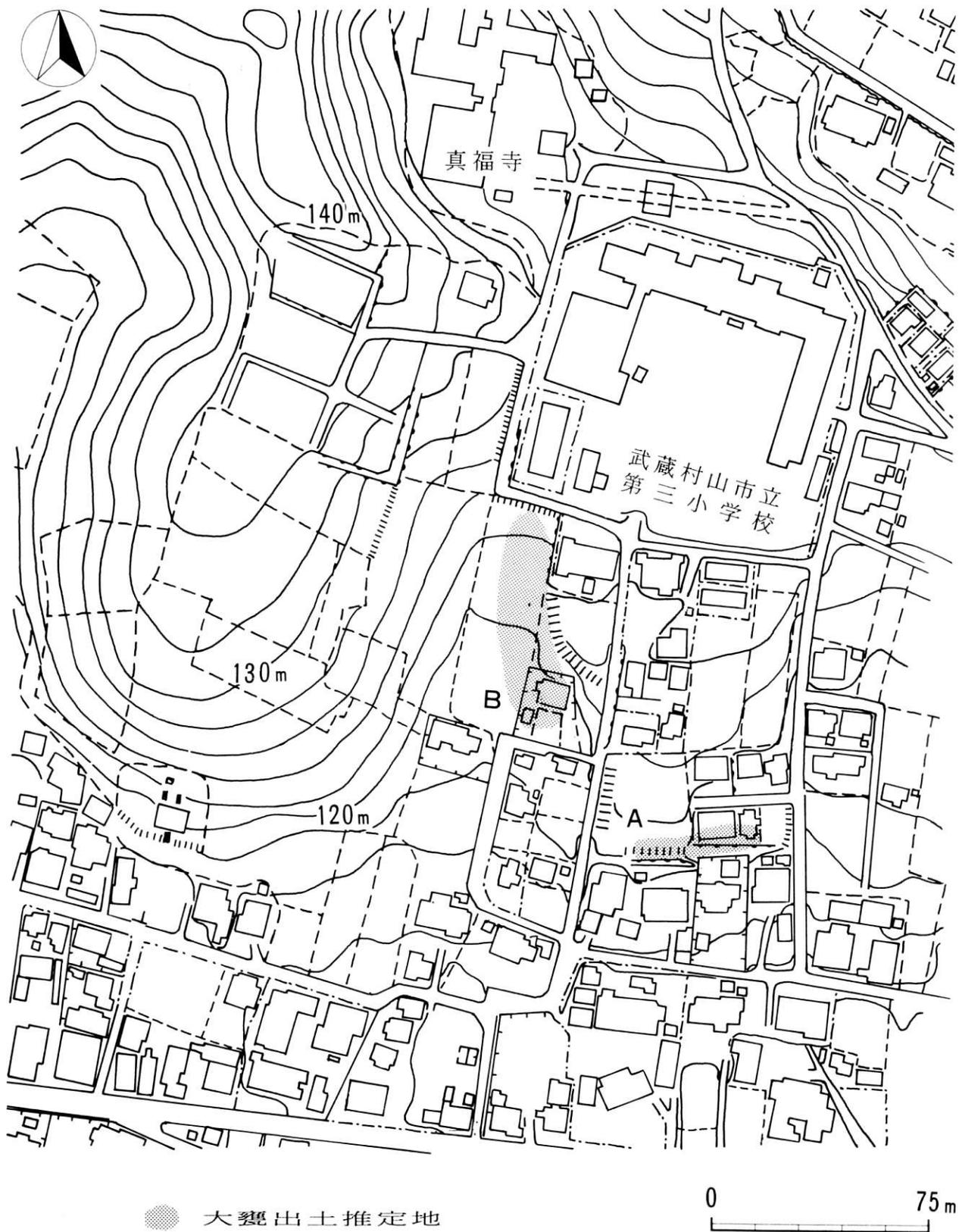
る口縁部形態や肩部の張り出し具合から第Ⅳ期に相当すると考えられる。実年代では新しく捉えても15世紀前半（1401年～1450年）代である。日本史の時代区分でいえば室町時代前期から中期に相当する。

これらの内容のうち①、②については複数の方々からの聞き取りでは、否定される談話は得られなかった。また、広い範囲で字屋敷山



第2図 常滑編年図（赤羽一郎氏作）  
中央公論社「日本陶磁全集8」より  
出土したことは聞き取り調査を行った方々全員の談話が一致していた。

より詳細な出土地点については第3図、第4図に示



第3図 大甕出土推定地と屋敷山周辺の地形図

したA及びBの範囲が挙げられた。Aの範囲については村山美春氏（文化財保護審議会委員）、中藤祥瑞氏（文化財保護審議会委員、真福寺住職）からの御教示である。Bの範囲については「屋敷山」の屋号を持つ内野秀雄氏からうかがった話である。

この他にも、現第三小学校の校舎の位置から出土したとの談話も得ている。いずれにしても、どの内容も二次的、三次的な伝承となってしまった現在、各説の紹介に止めておきたい。ただし、字屋敷山から出土したということはほぼ間違いのないものと思われる。



第4図 屋敷山周辺の地籍図（昭和39年）

4 まとめ

字屋敷山には従来、近世初頭の旗本前嶋<sup>まえじま</sup>氏の屋敷跡（陣屋<sup>じんや</sup>跡）があったといわれてきた。本資料も長い間おおやけ公にされなかったにもかかわらず、地元ではその出土の伝承が残り、前嶋屋敷と関連づけて考えられてきた。

聞き取り調査の過程で、「前嶋様の水甕」であるとか「前嶋様の便所甕」といった話をよく耳にした。第4図にも示したとおり、この付近には「ヤシキヤマ」や「イシグラ」といった屋号があり、他にも「イシグラ

坂」という坂の名称、「バンバ（馬場）ッカタ」あるいは「バンバ（馬場）グミ」といった地域名（正確には小集落名か）もあり、屋敷跡との関連は注目される。しかし、本資料に関しては前嶋氏屋敷跡との関連を考えるのは年代的に無理がある。内閣文庫に残る前嶋又二郎宛の所領宛行状（家康発給文書）の写しや寛政重修諸家譜を参照すると、前嶋氏の中藤村の知行は天正20年（1592年）からである。本資料の製作年代とは少なくとも150年の開きが生じてしまう。大甕の伝世を考慮しても開き過ぎといえよう。むしろ今後の調査によっては、より古い居館跡等を考慮に入れる必要も出てくるのではないだろうか。

次に本資料の使用状況であるが、出土地点さえも不明であり、積極的推論は避けるべきであろう。ただし、類例から学び、判断の材料を導き出すことは重要である。ここでは東京都内での常滑産大甕の類例を以下に示しておきたい。

①府中市郷土の森博物館所蔵の府中市宮町出土のもの

②品川区立品川歴史館所蔵の品川区御殿山出土と推定されるもの

③府中駅南口第二地区再開発事業建設予定地出土のもの

①、②はともに本例と同様、採集資料であるが、①については出土状況が判明している。①の事例の報告者英太郎氏は、地下式横穴墓の存在と甕の破片に付着した骨粉から甕棺葬を想定されている。②の事例は出土地点、出土状況不明としながらも報告者の谷口榮氏は御殿山出土の中世遺物群（板碑、五輪塔、人骨、武具）や清徳寺という中世寺院との関連から「甕棺などの葬送に用いられた可能性」を挙げている。③は唯一、発掘調査により検出された事例であり、大甕の使用状況を積極的に論じる証拠となるものである。まだ調査が終了したばかりであり、詳細は後日示されるであろうが、昨年実施された現地説明会では地下式横穴に伴う甕棺墓として発表された。

以上のように東京都内での大甕の出土事例は甕棺としての用途を示すものである。

さて、本資料の出土地の聞き取りを進める過程で次のような興味深い話をうかがった。それは現在の第三小学校校地の西側中央部から真福寺観音堂にかけて土手があり、そこに地下室があったというものである。

この話についても古老からの二次的な伝承であるが、渡辺善一郎氏（武蔵村山郷土の会）、本木義治氏（武蔵村山郷土の会）の両名から聞き得たものである。現状ではこの地下室について確認できないが、仮にこの地下室が地下式墳（地下式横穴墓）であったならば、屋敷山の地に中世の墓が存在したことになり、真福寺の存在とともに興味深い推論も可能となるであろう。今後の資料の蓄積が待たれる。

最後に本資料のような大甕の運搬、流通について触れておく。既に赤羽一郎氏により関東の常滑製品の検討の過程で次のような指摘がなされている。「以上、武蔵国の多摩川と荒川（入間川）の水系に沿って出土分布をみてきたが、関東平野の他水系にくらべて、長期間にわたる分布密度の濃さは、高価であったであろう陶器の消費能力を保障する生産力の高さと、両水系の水運の便利さを示しているといえよう。このことには常滑窯大甕が鎌倉と上総といった沿海部を除いてはこの両水系だけにみられることからもうかがわれよう。」長い引用になってしまったが、本資料も以上の指摘を裏付ける一例となるであろうし、河岸からの陸路についても問題を提起するものである。奇しくも東京都内の他の類例は品川（中世の湊）と府中（武蔵国府）であり、多摩川に沿った地域での検出である。

以上とりとめのない資料紹介となってしまったが、本資料について多くの御教示がいただければ幸いである。本稿については次の方々に御世話になった。厚く御礼申し上げる。（文責 山田義高）

井上理子 内野正 内野秀雄 大金雅人 高橋健樹  
塚本博之 中藤祥瑞 橋口尚武 村山美春 目黒洋志  
本木義治 森達也 山田栄司 吉田政一 渡辺善一郎（敬称略、五十音順）

〈参考文献〉

- 赤羽一郎他 1977 「常滑渥美 日本陶磁全集8」（中央公論社）
- 赤羽一郎 1984 「関東平野における中世常滑窯製品の出土分布」（愛知県陶磁資料館研究紀要3）
- 英太郎 1986 「府中市宮町出土の常滑焼大甕について」（府中市立郷土館研究紀要第十二号）
- 谷口 榮 1991 「品川歴史館所蔵の常滑大甕」（品川歴史館紀要第6号）

## 中村家旧蔵の<sup>さしせん</sup>緡銭

### 1 はじめに

平成4年1月20日、市内岸三丁目にお住まいの中村輝夫氏より繩に通した状態の<sup>かんえいつうほう</sup>寛永通宝192枚を寄贈していただいた。これはいわゆる「緡銭」と呼ばれるもので、<sup>あさなわ</sup>麻繩に銭を通して束ねている。寛永通宝192枚という数にも驚いたのであるが、「緡銭」の状態で銭が残されていたことにも注意が向けられた。

中村家は江戸時代後期に酒造業を営んでいた豪農で、近代以降も繭の取引を行っていた。当家に残る古文書には天保10年(1839)に秩父郡金崎村百姓五郎助より(中村)五左衛門が酒造株を譲り受けていることが記されている。本資料はそうした中村家の商家時代からの遺存品と思われる。

### 2 資料の紹介

本資料は写真のとおり、寛永通宝の束が二行で一連になっている。この一束を一緡と呼んでいる。近世において一緡は通常96枚であり、「くろくせん」などと呼ばれたりしたようである。本例も二行ともに96枚を数える。一説には、96という数字が2、3、4、6、8など多くの数で割り切れるという特徴を持っており、計算上の利便さから用いられたといわれている。中世においては、遺跡の発掘調査などで検出される銭(輸入中国銭など)の一緡は97枚が多いようである。

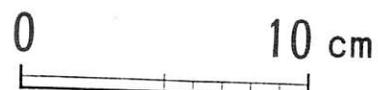
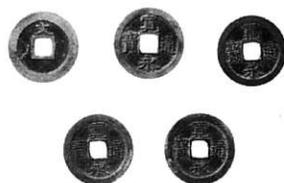
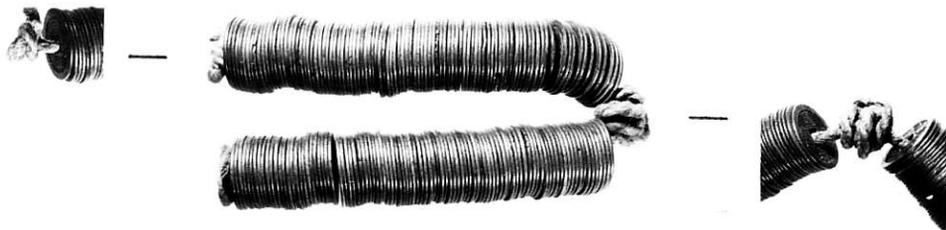
こうした一緡96枚や97枚の銭は九十六文、九十七文ではなく、百文として通用していたようである。このような慣行のことを<sup>しょうびやく</sup>省陌(百)法<sup>ほう</sup>という。

また、本例のように一緡を二行に結び、それを五連

にして一貫文(千文)としたものを<sup>あおざし</sup>青緡という。この青緡は礼物用として公家や武士の間で用いられていたが、江戸時代以降は商家や農家でも用いられるようになったといわれている。中村家に本資料の受領にうかがった折、他にも寛永通宝の緡銭が数連あったことを思えば、青緡の状態であった可能性がある。

繩は麻繩を用い、両端と中央に結び目がみられる。連ねられた寛永通宝192枚はいずれも裏に「文」の文字の入る「文銭」である。この文銭は寛文八年(1668)から天和三年(1683)まで江戸亀戸で鑄された良質の寛永通宝で、「新寛永」と呼ばれる最初のものである。

最後に塚本博之氏には貴重な御教示をいただいた。厚く御礼申し上げる。(文責 山田義高)

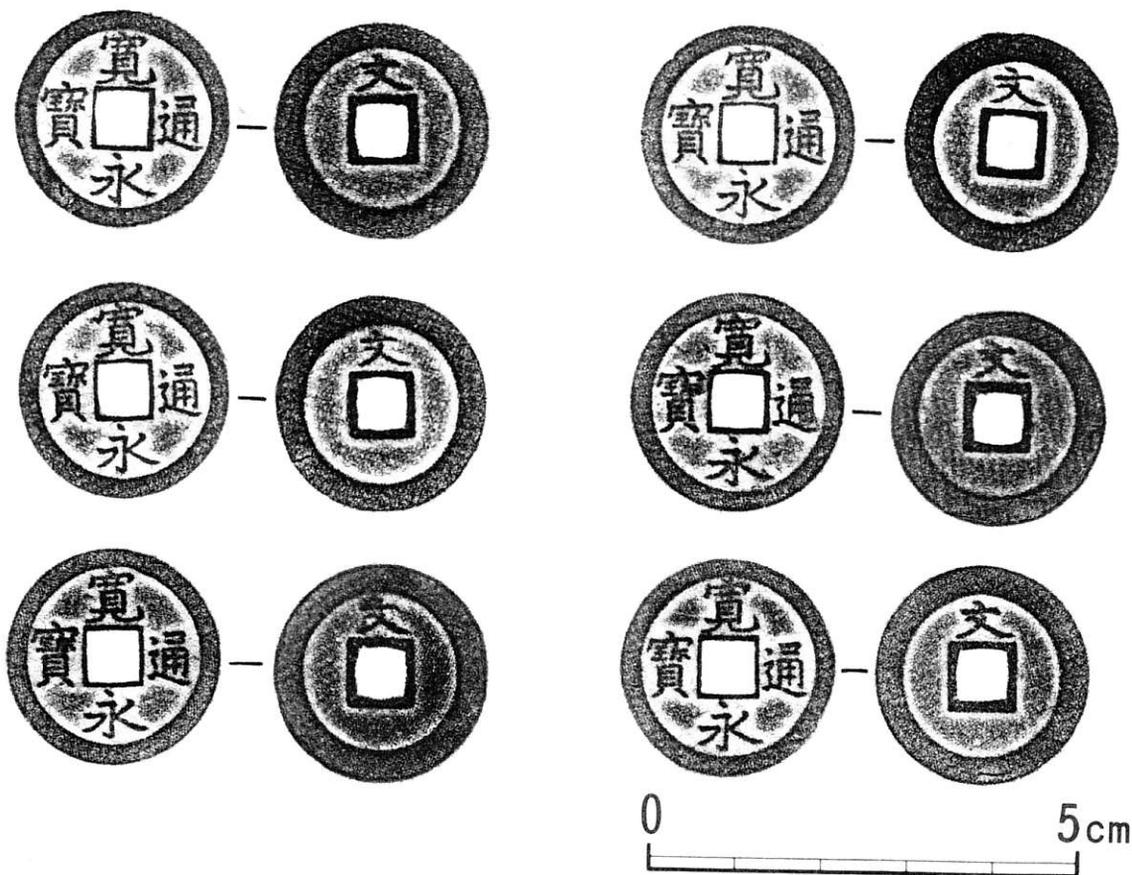


中村家旧蔵の緡銭

〈参考文献〉

榎本宗次 1979 「あおざし」 国史大辞典第一卷 (吉川弘文館)  
 滝沢武雄 1985 「さし」 国史大辞典第六卷 (吉川弘文館)

田谷博吉 1983 「かんえいつうほう」 国史大辞典第三卷 (吉川弘文館)  
 石井 進 1988 「銭百文は何枚か」 信濃40-3 (信濃史学会)



中村家旧蔵の寛永通宝

寄贈資料 (平成4年10月1日~平成5年9月30日)

区分 番号	寄贈者		寄贈品		区分 番号	寄贈者		寄贈品	
	氏名	住所	品名	数量		氏名	住所	品名	数量
1	栗原ハツ	残堀二丁目	椀	10	6	荒田重之	岸二丁目	地券	1
			脱穀機他	35				氷砕機	1
2	乙幡忠三	中央三丁目	鋤	3	8	小川孝治	岸五丁目	打製石斧	3
			籠他	19	9	比留間市郎	三ツ木一丁目	足踏み脱穀機	1
3	下田九一郎	岸三丁目	天秤ばかり	1	10	山田栄司	中央二丁目	大甕	1
4	加藤安義	中央三丁目	帽子	1				キセル	1
5	植野正雄	中央三丁目	着物他	20	11	波多野誠	中央一丁目	写真	2
			戦時国債	1	12	布田傑	三ツ木一丁目	戦時国債	1